

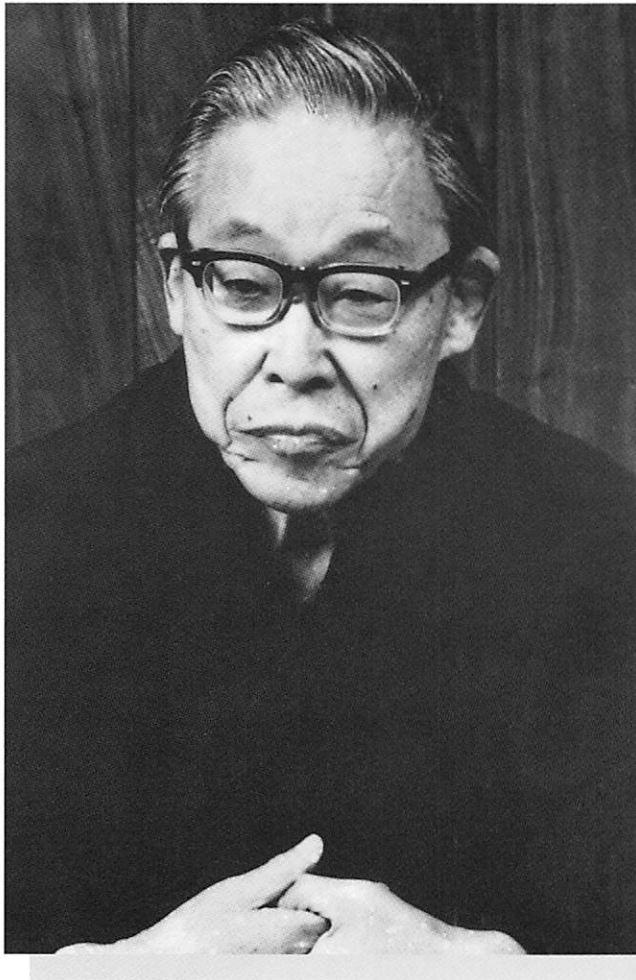
新

歌人群像

二宮冬鳥

● 歌にならぬように作るうた

● 井上生二 ●



● 真実を伝えるための短歌

歌にならぬやう歌にならぬやうにと作るうた一つの悲劇の如く思へど

この一首は一九五二（昭二十七）年、「日本短歌」七月号に発表された。二宮冬鳥にのみやとうちやう三十九歳の時の作である。短歌は寡黙の文学であると信じる冬鳥の作歌信条の原則神髄を示すと共に、私ども「高嶺」たかね門下への金科玉条の教戒ともなった。この歌は、歌集「黄眠集」おうみんに収められており、集中この歌の前に「二十年歌を作りてわれは来ぬ朗詠を聞くと歌がいやになる」というのがある。ともに、ここに謂いわれる「歌」とは、常識的な叙情に終始した通俗歌の謂いである。虚飾や蛇足、甘俗や安易を排して、一首をいかに削り上げるかに心血を注ぐ態度である。「黄眠集」の後記で、冬鳥は散文の形で作歌の信条を述べている。

「作歌の上の心構へとしては、自分のスタイルで真実を追求する以外にないと思つてゐる。約言すると、短歌には真実がありさへすればいいと考へる。真実を正確に伝えるために表現があるのだが、その方法は、写実によつて具象化を成就することだと信じてゐる。これ



は理窟ではない。私は毎月三千首ほどの歌稿をみてゐるが、ときどき感動をおぼえるのは、まことに具象化の行はれてゐる場合だけである。スタイルは、できるだけ新しい方がいいのかもしれない。しかし、スタイルに力をそそぎすぎると、本質から離れてゆく危険を甘受しなければならぬ。時代性などといふものは、ひつくりかへる性質のものである」

『黄眼集』は、冬鳥の第三歌集として一九五六（昭和三十一年）年に出刊されている。

ところで、掲出歌の四、五句「一つの悲劇の如く思へど」については、石田比呂志に以下の名解説がある。

「二宮冬鳥は短歌が『潜在の文学』であることを熟知していたが故に、その作る歌が華やかな顕在物を持たぬのは当然で、「惜しいかな花が無い」と上田三四二をして言わしめたが、冬鳥はそのことを「一つの悲劇の如く」自覚していたのであった。世阿弥の『花実論』

の、花と実が揃って始めて芸となり得るといふ身体的芸能と違って、言葉の芸術である短歌では、花を表面に出すことははしたない、ということを知った上での「悲劇」だったのではあるまいか」

二宮冬鳥は、一九一三（大正二年）年十月九日、愛媛県大洲市中村字河原四三五番地、父二宮重夫、母美香の次男として生まれた。本名、秀夫。一九三二（昭和六年）年、愛媛県立大洲中学校卒業、同年四月に福岡県久留米市の九州医学専門学校に入学し、翌年十九歳にして「高嶺」に入会、早川幾忠に師事した。当時、高嶺社は東京府杉並区天沼にあつた。大洲中学校一年先輩の三好弥の慫慂によつたという。爾後、一貫して「高嶺」に拠り、作歌につとめ後進の指導に力を尽くした。一九四七（昭和二十二年）年、戦時疎開の幾忠の要請を受け、「高嶺」主宰者となつて以降は、専心して結社経営、後学育成に尽す。一九九六（平成八年）年に八十三歳で急逝するまで五十有余年、峻厳なる完璧主義者として結社を統括した。本業の医家としては、九州医学専門学校卒業後、九州帝国大学医学部専攻科を経て、三十歳の若さで医学博士となり、敗戦の一九四五（昭和二十年）年八月には、陸軍軍医将校として長崎の原爆被害調査に当たり、

自らも被曝者となつた。久留米医大教授、大牟田市立病院院長、そのほか幾つかの大学教授を歴任した。

その処女歌集『青囊集』は、二十二歳から三十二歳までの作四百五十二首を収め、一九四七（昭和二十二年）年一月に出版された。当然としてわが国敗戦の悲嘆を刻印している。その巻末記に言う。

「歌壇の封建性はあらたまらないやうである。大家は力量甚だ多くないにかかはらず昔日の地位を失はない。悪習をやめなければ、乾坤一擲の時期に遭遇した短歌はこのまま滅亡するかも知れないとも思はれる」

そうして、自らは次の歌をのこした。

ラヂオ今宵にはかに日本の琴を弾ず落
涙してやまず寝台に俯伏になりて
焼け残る片側道の扉の下に七輪の火を
おこす群あり

闇市に絵描き絵具をしまひる日暮に
われは涙いでたり

当時の心境について、後年、「高嶺」創刊五百号記念号（一九七四〔昭和四十九〕年一月号）の「半髪記」に次のように述懐している。「昭和二十年八月十六日の昼すぎ、長崎の原野の上で、私は戦が破れて終はつたことを

二宮冬鳥

大洲市・城山藤樹像の前での冬鳥夫妻
(1979年4月)



知つた。さうして、その瞬間なぜか短歌の運命といふものを考へた。短歌はアメリカによつて禁止せられるかも知れない。その夜、涙を流しながら、砂漠のベッドの上でいくつかの歌を作つた。……昭和二十一年正月の雑誌で、斎藤茂吉の「あまのはら乱れむとするものもなくほがらほがらと朝明けわたる」といふ歌を読んだとき、私は驚愕とともに大きな絶望を感じた。私が待つてやまなかつたのは、この歌人の味はつてゐるに違ひない苦痛の表白であつた。戦争を讃美してやまなかつたこの歌人は、短歌の滅亡を前にして、どのやうな心でどのやうな形で、短歌蘇生のためにその血を流してくれるのであらうか。そのことは私にとつて、短歌の命運にかかはる鍵であつた。へあまのはら乱れむとするものもなく

や「ほがらほがら」とは痛切な裏切りであつた」

茂吉を心から敬愛してやまなかつた冬鳥の、この痛切の言は、今なおかぎりなく鋭く、そのゆえにかぎりなく悲しい。

具象・平明な歌にひかれて

二宮冬鳥は、生涯に九冊の歌集を出し、没後に一冊の遺歌集を残した。年次別に、各歌集の秀歌を抄し、その事蹟にふれたい。

第二歌集『候鳥』は、扇畑忠雄、岡部文夫、服部忠志らとの四人歌集として一九五二（昭和二十七年）年に発行された。冬鳥はその中で、「静黄」という百五十首を発表している。

天とほくきたれる鳥のひとつらのある
とき白し混 混として

『黄眼集』は、すでに述べたように第三歌集に当たるが、冬鳥壮年期のもつとも充実した作品に満ちている。

砂庭にはつかに面いだしたる石はかぎりなき下部を有せり
釣竿をかつく少年とその父と夕ぐるる
時に足そろへたり

第四歌集『日本の髪』は、一九六一（同三十六）年四月から六月まで、ヴェネチアでの国際病院連盟総会に日本代表として出張した折の紀行歌集として、六三（同三十八）年八月に出刊された。

幾重にも円を描ける天の朱おひおひて
今日は日本のそら

『南昏集』は、第五歌集として一九六四（同三十九）年十月に刊行。五六年から六二年までの六百四十八首を含む。

伝来を軽んずる吾の目のしたの利久死
直前の作茶杓ナミダ
手に握るばかりの石にみづからの二字
の残りて眠る去来は

かかる歴史的事蹟、人物を材にとつた作歌は、まさに冬鳥独壇場の面目を示している。

第六歌集『昨夢集』は、一九七四（同四十九）年六月に出刊され、六三年から七二年までの九百八十四首を収める。

俯きて歩むがよきか仰向きて歩むがよきか心臓ひとつ

一九六八（同四十三）年八月に大牟田市立病院長の職をはなれ、久留米市小頭町に居を



移した。狭心症療養のため二か月入院したことがあった。

第七歌集『西笑集』は、一九七三年から八〇年までの五百三十七首を入れて八一（同五十六）年十月発刊された。七八年には読売新聞（西部本社）歌壇選者に就任している。

わが母がわれを抱きて縁の上にいばりをさせてくれ給ひし恩

第八歌集『壺中詠草』は一九八六（同六十一）年七月、「現代短歌全集」（短歌新聞社）の一冊として出刊。八一年から八四年までの二百八十三首を収める。この間、八三（同五十八）年四月二十二日には、「高嶺」創始者早川幾忠師が八十七歳で逝去された。

その夜より寐ぬる布団を厚くしてその
ままの夏そのままの秋

本書の「あとがき」には、次の言葉が印象ふかく明記されている。それは冬鳥晩年の作歌信条を単純明快に説いたものである。

「歌はますます平明を愛するようになった。現時の歌壇は平明などというものをあまり好まないのではないかと思われるが、元来が東洋の芸術は平淡の境地を庶幾してきたのではなかったか。平明に私が強く牽引されるのは、年齢がそれに応じてきたということかも知れない。写生を尊ぶことにも変わりはない」

『忘路集』は、生前最後の歌集として一九九一（平成三）年九月に上梓された。八五（昭和六十）年から九〇（平成二）年までの五百二十二首を収める。この間、白内障手術、冠動脈バイパス手術、前立腺摘出手術などが相次ぎ、好褥の身をなげくことが多くなった。

薔薇静脈移されて動くわが心臓散歩
り帰りしばらく抱く

くちづけをしてくれる者あれば待つ二

宮冬鳥七十七歳

老いにも病にもくじけず、なお生命力を懸命に燃やさんと希求した作者らしい最後の一

首である。

第十歌集『忘路集以後』は、冬鳥逝去（一九九六（平成八）年八月十九日）一年余の後に、遺歌集として編纂された。九一（同三）年以後の作六百五十四首を収めた。

いつまでも咳しつづ鼻ぬぐひつづ二宮
冬鳥終結のはじめ

いまよりは夏にむかはむ日のひかり秋
にむかへる如く悲しむ

漁師は死にて一人前といふ死にて一人
前となる歌人ありと思はず

とはの眠りの如く眠りにゆく臥床ある
いは近しとはのねむりも

十冊の歌集にしたがってその一生をたどってきたが、この巨人の僅かの一端をのぞいたにすぎないかもしれない。二宮冬鳥は博覧強記、感覚犀利、探究深慮にして、美術、絵画、骨董、刀剣の各分野に至らざるなき審美眼をもつ一家であった。しかしそれらは所詮、冬鳥の身心をたのします悦楽にすぎなかったのではないか。一身の極北に永遠に巖然と位置する短歌「歌にならぬように作るうた」こそが、その身の極上のこの世の証であったと思われる。

（いのうえ・せいじ「高嶺」編集発行人）